

FADO

31

Julho 2001

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

4月、遅い春を福島で迎えた。ひとつは鏡石、71歳になる母の発案で、町の図書館にある視聴覚ホールでのコンサートだった。

両親が、大阪を離れ福島へ移ったのは、かれこれ20年近く前のことになる。私は、大阪の「ベコー」でシャンソン歌手として、細々と歌い始めた頃で、やっと見つけた自分の好きなことを捨て切れず私は大阪に残った。丁度母が今の私の年の頃で、新しい土地での生活は、大変だったろうと思う。しかし、母は持ち前の物怖じしない明るさで、見事に福島の小さな町に根を張った。会場に入りきれない程詰め掛けた聴衆を見て、私は、心底驚いた。東京生まれの私にとって、両親が住むその町は、私の唯一帰ることのできる「ふるさと」なのかもしれない。年に一度も帰ることはないのだけれど。

翌日は、ポルトガルから一時帰国した横浜の斉藤氏の運転で名残の桜に導かれるように、三春の山を越え、船引の大鍋矢神社へ向かった。以前、郡山でのライブの時に会員になって下さった柳沼氏が、「桜の宴」と銘打って主催して下さいました。

翌21日は、上州新田郡。懐かしの木枯らし紋次郎の里である。宿の向かいに、人の気配のない家があった。看板の「紋次郎本舗・木枯らし饅頭」という文字が微かに読み取れた。

翌22日は、有名な「からっ風」が関東ローマ層の赤い土を砂嵐さながらに吹き上げる中を、前日の主催者の山口氏の車で、氏の市民運動論を聞きながら、埼玉の行田へと向かった。宿に隣接して温泉センターがあったので、目から、鼻から、口から入り込んだ砂を洗い流して、コンサートに臨んだ。

その晩は、今回のコンサートの仕掛人北海道の千田女史と明け方近くまで話し込み、帰阪。その夜は心斎橋「アートクラブ」でのライブ。

5月23日、高松で久しぶりに五木寛之さんと再会。「大河の一滴」の譜面と詩をいただいた。氏のプロデュースによるCDを出すことになりそうだ。月田、生まれて初めてのオリジナル曲、喜びと不安で体が震えた。

様々な人との出会いで、人生が作られていく。私は、五木先生に出会えた幸せをかみしめている。ここまで私の歌を愛し、支えてきてくれた人達に、そして今はいない人たちに、「ありがとう」と夜の空に向かって叫んだ。

7月1日の大阪ブルーノートでのライブの最後に、去る4月16日、48才の若さで急逝した河島英五さんの「生きてりゃいいさ」を歌った。「…君にありがとう。とてもありがとう。もう会えないあの人にありがとう。まだ見ぬ人にありがとう。今日まで私を支えた情熱にありがとう…」彼の歌は、私たちを励まし、私たちの心に生き続けるだろう。

人の心には、悲しみや、怒りや、嫉妬や、やりきれなさや、憧れや、様々な夢が、渦巻いている。詩人は詩に、絵描きは絵に、作曲家は音に、歌い手は声にその思いを託す。私たちは、それらを読んだり、見たり、触ったり、聞いたりすることによって共感し、「ああ、一人じゃないんだ」と一条の光を見る思いになる。私は、時々、歌い手。でもそれより以前に、泣いたり、笑ったり、怒ったり、いつも、常に、人間です。そして女です。

BS朝日『牛山純一・20世紀の映像遺産』 収録顛末記

テレビ朝日映像から、一本のビデオが送られてきた。ギリシャ、イタリアの下町の音楽風景に混じって、ポルトガルの漁村ナザレの1974年の映像が収録されていた。その映像に何かコメントを付けてほしいとのことだった。「今のナザレには、漁師を、待つ女を演じ続ける人達がいるだけだ」といったポルトガルの友人の言葉が脳裏をよぎった。映像は、荒れ狂う海に向かって、狂わんばかりに、帰らぬ肉親の名を叫び、神に祈る肉親達を写し出していた。まさに『暗いしけ』の世界だった。見終わって私は以下の感想を一気に書き終え、制作会社にファックスを送った。

「実に貴重な映像だ。私は、ポルトガルのファドを歌っているが、年々歌が生活から離れていくのを感じている。ファドはポルトガルの港町リスボンの裏町で生まれた歌だ。迷路のように入り組んだ狭い石畳の道、日も差さない裏窓。貧しさゆえの逞しさ、貧しさゆえの諍い、貧しさゆえに人々は寄り添うように暮らしている。そんな人間の吹き溜まりの中からファドは生まれた。果たせぬ思い、満たされぬがゆえに大きくなる夢、愛するものから離れていることの嘆き、会えない人への思慕。共にそこに生きている人達と分かち合い食べることへの感謝。諍いは時に、そこに生きる人達の接着剤にもなる。どんなに罵倒し合っても抱き合える素直さ。

漁師町ナザレに生きる男達、女達、子供たち。助け合い、寄り添い合いながら生きている人達。その姿に、私は心のどこかが痛んだ。確かに痛み、涙があふれ出た。

私たち日本人はいつからその事を忘れてしまったのだろう。戦後の貧しさの中で、私たちはお互い助け合い生きてきた。なのに豊かさは、人の命の大切さをどこかに置き去りにしてしまった。命をなくす危機感のなさは、命の軽視にもつながってゆく。

生活、共同体の不在。そこから出口のない孤独が心を覆い尽くしてゆく。物質的には豊かになっても、私の心の中には荒涼とした風景が横たわっている。

そんな私がファドに惹かれたのは、そこに人の愛を見つけたから。生きている事を思い出させてくれるから。

私はポルトガル人でもない。過酷な海という大自然の中で生きる者でもない。リスボンっ子にもなれない。現地の、しかもかたくなに自分達のライフスタイルを崩そうとしない人達のファドを聞く度に、バックグラウンドのなさに私は打ちのめされる。

けれど最近こう思う。貧しさの中から生まれたファドは、今、人の心の貧しさの中から再び生まれようとしているのではないかと」

放送作家の松本氏、プロデューサー氏、現場スタッフの熱い視線にさらされながら収録を終え、『牛山純一・20世紀の映像遺産—南ヨーロッパ人間模様 1』は、3月18日、BS朝日で放映された。

ポルトガル語学習雑学くフアド雑学その1>

H・T生

三年前より「大阪日本ポルトガル協会」主催のポルトガル語教室でポルトガル語を学習している。ロドリゲス先生の的確でスピーディーなご教授によって現在、未知から幼稚の段階に到達しているのではないかと思っている。ロドリゲス先生に心からお礼を申し上げたい。語学というそこしれぬ深さと広さを持つこの無限の世界に、限界のある自らの体力と能力の身を置いて、今、私は無限と有限の世界を彷徨しているのである。

「fadista」というポルトガル語は、ポ和辞典で「フアドを弾く人」「フアド歌手」、そして「ならず者」「ごろつき」「ダンスホールに出入りする人」、俗語で「売春婦」となっている。現在では、フアド歌手として一般的に使われており、「fadista」=「ごろつき」「売春婦」などという短絡的な理解をする人はいないであろう。何故このような俗語が生まれたのか、「悲しいフアドの歴史」や「伝説のフアド歌手マリア・セヴェーラの生涯」について知らなければならない。俗語は民衆の中から発生し伝播した言葉であるから、「売春婦」という言葉を差別用語だと決めつけることはできないが、ここでは日本語の「遊女」という言葉を使わせてもらう。「遊女」とは、現在では、男に弄ばれる女、男の遊びの相手、男の快楽的な性的対象として理解されているが、

古来、「遊女」とは、性を聖なるものとして生き、神々と共に遊んだ女たちであった。古代、月の女神イシュタル、美の女神ヴェーナス、伊邪那美命など、神話にでてくる記録は、生殖を目的とし、あるいは快楽や愛情の追及として行われる性的交渉が、かつては神聖なものとして関わっていた事を教えてくれる。「娼婦制(ヘテリスム:自由な性愛)から単婚へ、母権から父権へ、そして男性支配の一夫一婦制への社会制度の変化があっても、「遊女」の存在は絶えることはなかった。近世に入って日本では、「廓」が成立し、絢爛たる廓文化が創出した。この廓文化に、胡弓、歌留多、象牙やべっ甲の細工物など南蛮文化が少なからず影響していると思われるが、「遊び」から文化が生まれ、「遊び」と共に文化が育まれたのであって、遊女の歴史は文化の歴史といっても過言ではない。

「廓」の中で、高い知性と教養を持ち、歌舞音曲に優れ、容姿端麗なる遊女の中から選び抜かれたたぐい稀なる女性に「大夫」の位が与えられた。所が違っても、マリア・セヴェーラもそのような女性であったかもしれない。リスボンの底辺層から発生したフアドは、19世紀の半ば、彼女の出現によって一般市民のみならず上流階級にまで広がった。フアドも又「遊女」が育てた音楽であった。

(次号に続く)

(T氏から「ポルトガル語学習雑学」と題する400字詰め原稿用紙17枚にも及ぶ投稿を頂きました。その中から、月田の独断で、フアドの成立から今後について書かれている所だけを2回に分けて掲載させて頂く事にしました。)

cartas

●先日は、あこがれの月田秀子さんのコンサートを拝聴できて大変幸せでした。コンサート直後について思っている事を素直にお話してしましましてびっくりさせてしまい申し訳ございませんでした。

私、コンサートを聴きながら「表現」ということについて考えておりました。ラジオやテレビを通して想像していた「フアド」はもっともっと内面に向かってつぶやくように歌うのでは?というものでした。しかし、今回、目の前で聴いてみて、それだけではなく、もっともっと外側に向かってストレートに歌うものだという事がわかりました。私があの場合、オペラとの類似についてお話ししたのは、オペラと似ている点を発見し、とても嬉しかったからです。特に、イタリアオペラは自分の感情をしっかりと表に出して歌い、演じます。苦しければ苦しい、悲しければ悲しいとはっきりと表現します。声の出し方は違っても、そのストレートな表現はやはりヨーロッパのものだと理解しました。フアドとの共通点がたくさんあり、イタリア、スペイン、ポルトガルは陸続きなのだと思いながら聴いておりました。

それにしても、月田さんの歌は素晴らしいですね。言葉の意味はよくわからなくても心にストレートに響いてきました。人の心を動かす歌の歌える人は本物だと思います。久し振りに「本物」に会えて、本当にいい夜でした。長い間の積み重ね(歌の練習だけでなく、人生経験の)が今の月田さんをつくっているのだなと、その声、姿、お話からよく伝わってきました。お会いして一つのことを打ち込んできた女性の美しさに出会えたような気がして、自然に握手を求めてしまった自分にびっくりしました。オペラやコンサートではよく「ブラボー」を言って拍手をしますが、フアドコンサートでは、言っていないのかしらと夫と話しながら帰ってきました。心の中では何度も何度も「ブラボー」と叫びながら。(福島・K.M)

(余り褒められて木に登りそう。心して歌の練習をしなきゃいけないかな…。ブラボー大歓迎!その声聞くと、がぜん乗ってくる月田です。以前ライブで、知り合いの客に「月ちゃんかわいい!」と掛け声かけられ、「うるさい」なんて一喝してしまったこともあります。)

●北海道公演のご成功おめでとうございます。それにしてもお疲れになったことでしょう。札幌公演の夜、会場の隅っこで聞き入っていました。心にしみわたりました。出だしからいきなりFADOというか、TSUQUIDAの世界に引き込まれ、魂が抜けたような気分になりました。簡素だが表現力に富んだステージマナー、のびやかにしなやかに迫ってくる歌声一名前どおりの秀演だったと思います。「魔笛」をキャンセルしたかいがありました。ほんとにいい夜でした。それとフアドは隅っこで聞くのが合っていると思いました。小生、昨年の恵庭以来でしたが、あの時とは別人のようで(失礼!)、「こりゃ、あと30年イケル!」と勝手に思ったりしました。楽しみです。ついでながら、バックのギター、ヴァイオリンとも好演で、月田をよくひき立たせていた。中でも帽子のギター弾きは控え目ながら、存在感があり、絶品だった。(札幌・K.T)

(北海道公演では、6公演2,000人近くの皆さんに聞いていただいたそうで、私は、疲れるどころか、皆さんに元気をいただいて帰りました。帽子の野上圭三からは、いろいろ学ばせていただいています。ただの大喰いではありません。私もただの大酒飲みではない…?)

●素晴らしいCONCERT有難うございました。感想は色々あるけど、月田さんて本当にすごい人なんだ!!間もなくあなたのお望みの道が開かれるのでしょうか。苦節50年?歌はうまいし、きれいになるし!どうなるの?売れっ子になっても不思議はない。BIG CHANCEを逃さぬように!!ご活躍を期待しています。あと10年といわず長く歌ってください。墓場からでも応援しています。大河の一滴よりBANDOの紹介やで!河島英五、泣けました。本当によかった。RECORDINGするならこれやで!「汽八」は冬の限定版とちゃうの?ええそなこと書きました。ごめん!

(横浜・N.T)

(ブルーノートのライブでは、バンド紹介を忘れ、本当にごめんなさい。ピアノ安次嶺悟、ベース小笹了水、ポルトガルギター池側忠、そしてギター、オカリナ、ヴォーカル、野上圭三でした。遅ればせながら。)

読切連載
秀子のエピソード帖
内間 天馬

ブルーノートは燃えているか?

その男はアホだった。ライブの殿堂、改装なった大阪ブルーノートのゴージャスな玄関で気がついた。下駄履きでは入れてくれんだろうな。阪神百貨店に取って返し、一番安いズックを買ったのはいいが、何を思ったかこの男、下駄をコインロッカーに預けてしまったんです。袋にでも入れて持ち込めばいいものを。ブルーノートでは、開演まで45分もあるのに、もうすでにかなりの熱気です。月田さんにとって、180度以上客席に囲まれてのステージは、小さなライブハウス以外では初めてじゃないかな。ブルーノートの入場料金、あのデュークエリントン楽団が8,000円、ジョージ・ベンソンが8,500円、そして、月田さんが8,500円。大したもんですねえ。

さて、あるベテランジャズベーシストに聞いたことがあります。今、大阪で一番お気に入りのピアニストはどなた? 「安次嶺悟かなあ」。その安次嶺さんのピアノを中心にライブの開幕です。曲は9月封切り予定の映画「大河の一滴」のメインテーマ曲。初めて月田さんのライブを聴くという、平野郷かつての豪商、奥田家の末裔、奥田のおじさんが、僕の耳元でそっと囁く、「エエ曲やなあ」。奥田さん、作曲した加古隆さんてすごい人なんよ。ジャズピアニストとしても、現代音楽家としても超一流で世界的な人ですわ。緻密で繊細な、

ある種の彼の音楽は、もう天空の音楽でっせ。月田さんは、五木寛之さんが詞をつけたこの曲をポルトガルでレコーディングするとか。

そして、お馴染みのファドナンバーがブルーノートを完全に彼女のものにしてしまう。アツと驚いたのがビートルズの「イエスタデイ」。きまぐれコンサートのきまぐれ故か。こういうのっていいんじゃないかな。僕は彼女の「竹田の子守歌」をいつの日か聴いてみたいね。黒一色がトレードマークの月田さん、ベージュというかパールホワイトというか、ハマナスを黒のビーズとスパンコールであしらったというドレスで現れる。このシックでゴージャスなドレスは見事にミッドナイトブルーの内装にマッチしとります。

ギターの上野さんとのデュエットが始まる。となりの妙齢でエレガントなご婦人に、そっと眩く…、あの野上さんてね、ママレモンのCMソングを歌っているんですよ。「エーッ、ほんど?!」驚いた彼女、隣の塩崎画伯に「ねえねえあの方、ママレモンですって」。ちゃうつづのに。ママレモンじゃなくて、ママレモンを歌っている人! 彼女達、月田さんがしゃがめば、思わず腰を浮かせたり、彼女の一挙手一投足すべてを見逃すまいと目を凝らす。その挙げ句ふたり声を揃えて「すてきねえ!」。こういうファンの方がいるんだなあ。

終演後、奥田のおじさん、「ウーン、わし、月田さんのファンになりそう…」

こうして大阪ブルーノートでのコンサートは、内も外も熱く燃えたのでした。

アツ、えらいこっちゃ、下駄を忘れた。

(馬ちゃん、私の入場料は、オードブル、ワンドリンク、さらにワイン付の値段です。会員の方には7500円で、という粘りに粘った交渉の結果です。月田)

fados canções

昔という名の波止場

訳詞: Caldo Verde

昔という名の波止場に
空の船が繋がれている

外海から忘れられた帆船は
あなたの思い出の砂に埋もれる

昔という名の波止場に
漂うのは疲れきった船だけ
旅立つこともないままに
忘れられた権たち
取り繕って生きてきた疲弊が身に沁みる

船も無く 帆も無く
もはや権すら無い
船も無く 帆も無く
昔という名の海に向かって
私の波止場を失った

夜の闇の中で私たちは消えてゆくだけ
昔という名の海に向かって
私の波止場を失った
夜の闇の中で私たちは消えてゆくだけ

CAIS D' OUTRORA

Letra: Luis Macedo
Musica: Alain Oulman

Nos Cais d'Outrora
há navios vazios

Está vales esquecidos do alto mar
São sombrios dos rios do recordar

Nos Cais d'Outrora
há só barcos cansados
Está navios esquecidos
por não partir
Sinto cansaço vago de me fingir

Não há barcos nem velas
já não há ramos
Não há barcos nem velas
Em frente o mar d'Outrora
perdi meu cais

À noite nós perdemos e nada mais
Em frente ao mar d'Outrora
Perdi meu cais
À noite nós perdemos e nada mais

informação

●200万部の大ヒットエッセイを映画化した「大河の一滴」(監督:神山征二郎、脚本:新藤兼人、主演:三國連太郎、東宝配給)が9月1日公開されます。加古隆さん作曲のメインテーマに五木寛之さんが作詞された「大河の一滴」を歌わせていただくことになりました。録音の為、7月リスボンへ行ってきました。好評の、同じく五木寛之さん作詞の「汽車は八時に出る」も入れてのCD制作も五木さんがもくろんで下さっています。お楽しみに!

●五木寛之さんの『他力』の英語版『TARIKI』(講談社)が発売されました。表紙は五木さんの顔写真。
ご本人に曰く、50歳頃の写真ということですが、格好いい!

●ABCラジオ番組“ちょっといい話”(関西地区のみ)に出演、7分ほどおしゃべりします。
5月に放送された第二弾です。

放送予定日 8月5日(日)午前8時00分~8時10分



2001.7.1「きまぐれライブvol.6」大阪ブルーノートにて

<月田秀子のスケジュール>

7月 16~24日(水)	ポルトガル	
26日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ:075-361-3535
27日(金)	静岡・藤枝「ジェノバ」	*問合せ:090-4855-2320 鈴木
28日(土)	東京・銀座「アルテリーベ」	*問合せ:090-6344-2299 斉藤
29日(日)	神奈川・藤沢「川合邸」	*問合せ:0466-27-1927 川合
30日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ:06-6212-2870
8月 1日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ:06-6304-1745
11日(土)	岡山・後楽園「幻想夢庭園・ナイトフェスティバル」	*問合せ:090-8959-0148 川本
20日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ:06-6212-2870
23日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ:075-361-3535
26日(日)	北海道・札幌「びあの喫茶」	*問合せ:011-616-7355
27日(月)	北海道・札幌「リデーレ」	*問合せ:011-614-6818
28日(火)	北海道・苫小牧「カフェドモンキー」	*問合せ:0144-76-8060
29日(水)	北海道・倶知安「ホテル第一会館」	*問合せ:0136-22-1158
30日(木)	北海道・洞爺村「てるざ」	*問合せ:0142-87-2150
9月 5日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ:06-6304-1745
15日(土)	大阪・中央区「高津神社」	*問合せ:06-6761-2628
17日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ:06-6212-2870
27日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ:075-361-3535

「TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO 2001」の開催日が決まりました。

12月8日(土) 大阪・桜橋「サンケイホール」

12月16日(日) 東京・銀座「博品館劇場」

<編集後記>

晩酌の当てに湯豆腐。スープ点けた。舞い込む北海道からの涼しい便り。わたしゃ、大阪であせも作って、黒焦げになりながら自転車で走り回っている。甘えるのが下手で一人あくせく遅ればせながらの31号発汗。いや発刊。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ
<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/index.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第31号
- 2001年7月発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808